

地球システム倫理学会  
シンポジウム報告 ”Philosophy of Nature”  
ウィーン大学、2016-5-19 -5.21

## 国際シンポジウム「自然哲学」 **Philosophy of Nature**

2016 年 5 月 19 -21 日、ウィーン大学、主催＝ウィーン比較思想・学際研究協会  
KoPhil-Verein

認知科学と分析哲学が多く地域で主流をなしている現代の哲学界、輝かし成果も一部にあることは事実だが、他方、問題も少なくない。分析知のみでは説明することのできない「経験と自覚」、「絶対的なもの」、「包括的な真理と真実」、「喜びと苦悩」が人格形成に果たす役割など、種々の問題群が現代の哲学界では往々にして軽視されている—といってもよい。人間のあらゆる形態の思索を、人間の行動を全体的に省察する一つの本活的体系に構築していくという、「哲学」本来の本領は後退し、或いはその本領を失いつつあるのだろうか。

こうした様相を背景に、ウィーン比較思想・学際研究協会(KoPhil)は新たな「自然哲学」への取組みをウィーン大学で展開した。欧州は主催国オーストリア、ドイツ、ギリシア、セルビア、イタリア、ポーランド、ロシア、東アジアは日本、中国、台湾、北米はカナダとアメリカ、そしてオセアニアではオーストラリアなど、世界 13 か国から 40 名あまりの自然科学、人文系の学究者らがつどう会となった。哲学、人文系からは自然科学への深い関心を寄せる人々、自然科学分野からは人文系と哲学への関心を抱く人材、これらが交錯して一つの異分野交流の場を形成する。そのめざすところは、自然科学・認知科学と哲学分野、その境界領域でのとの相互の出会いから誕生しうる新たな知識である。

初日はウィーン大学キャンパスの「礼拝堂」といわれる古式ゆかしい場で、ヘルベルト・ピッチュマン (Herbert PIETSCHMANN, ウィーン大学、オーストリア国立学術院、理論物理学)、ヴィンセント・シェン (Vincent SHEN, カナダ、トロント大学、中国文学、中国哲学) らの特別講演のほか、主催者ウィーン比較思想協会 KoPhil 理事長 橋 杢 (はし ひさき Hisaki HASHI) の基調講話で開幕した。

ピッチュマンのテーマは「自然科学の知識は『普遍的真理』といえるのだろうか?」。現今のデジタル情報ネットワーク時代においては、自然科学的知識即 普遍的真理であるかのように考えられやすい。が、それは分析思考もどきというべき一知半解の知識であり、そこに欠如しているのは哲学の思考である、とピッチュマンは看破する。ピッチュマンによれば、自然科学における「真理」とは以下の三つの基礎条件を大前提とするものである。1) 測定可能であること、2)測定から導かれた「真理」は常に再現可能であること、3)測定され、「再現」可能な真理は、常に一定の「法則性をしめすものであること。これらの前提を哲学的に省みるとどうであろうか。そこには疑問も生ずる。では、測定可能、再現可能、常に安定した一律の法則性、という三者大前提を満たさないことから「普遍的真理」からは度外視されてしまうのだろうか?たとえば、自然界

地球システム倫理学会  
シンポジウム報告 ”Philosophy of Nature”  
ウィーン大学、2016-5-19 -5.21

のあらゆる現象を自然科学の種々の法則で説明しつくすとしよう。そこには決定的に結論付けられるものもあり、決定的には結論できない現象も含まれている。ともあれそれらを科学の立場で説明しきったあと、なお残る疑問がある。「こうした無限の法則と無窮の問いを投げかけてくれる自然とは一体何なのだろうか？なぜこのような普遍性が自然界には存在しているのだろうか？」これはまさに哲学からの問いかけであって、自然科学の立場では説明しきれないものである。なぜなら、自然科学での疑問とそれへの解答は、自然界のある特定の事象を対象に定め、そこでの測定可能性、事象の再現可能性と一定の法則性に焦点をしばって探求するものであるから。先に述べた「では何のために、こうした普遍の真理が存在するのか？」という「全体を省察する学問」が哲学である。「人間が人間の思索を自ら省察し、真理真実の究明に向けて論考する」という場にこそ哲学の本領があるのであって、個々の自然科学はその立場には至れない、とピッチュマンは論ずる。詳細は省くが、ピッチュマンの論考のゴールはといえば、現今の世界でともすれば出てきがちな「認知科学・コンピュータ情報科学 中心主義」、「自然科学 絶対主義」への批判的見地である。この時代、希求されるのはまさに「コンピュータ情報科学至上主義」と哲学系・人文系、相互間の開かれたディアログであり、そこから新生する transcultural 一超次元の文化をめざす思考である。

ヴィンセント・シェンは台湾出身で、北米を本拠として研究活動を展開する国際人である。(本名は「沈 清松」)。この日の特別講演で氏は朱子の構想した壮大な自然観と世界観を展開した。朱子の宇宙論は西洋的自然科学の形成する宇宙論とは異なり、「広大な自然界に抱かれる一要素として人間は、いかに自然とむきあい、自然の法則のつとめて人倫の道を形成するか」、という人間学の立場である。そこに展開する智識は自然科学の知識とは異なり、普遍性と個別、全体と個がどのように連携し、全体の普遍性が個々の事物にどう反映され、個々のものごととはどのようにして全体的普遍性の立場と連携するのか、といういわばシステム理論である。古典的「格物致知」の立場は氏の明解な論述を通して、現代に再生する見事な構造論となる。朱子の普遍的世界観は王陽明では「知行合一」の実践論までしばりこまれるが、そこで顕著なのは、超越的真理の次元と経験的真実の次元を西洋哲学の様に二元化することなく、「超越 即 内在」をめざす実践的人間学が打ち立てられることである。ともすると「朱子学」には「前近代的」、「中華思想」、その他種々の偏見や誤認がついてまわるが、それらは一種のデフォルメともいえるべき歪曲解釈であり、偏見を離れて朱子の思想の真髄に迫ることが必要である、とシェン氏は説く。さらには現今の西洋と東洋の哲学思想の普遍的出会いの場における「比較思想」の重要性に氏は言及する。一即ち自己が他者の次元、他者の磁場、他者の論理の磁場に立ち、敢えて他者の倫理になりかわって自他間の対話を促進し、相互交流することの重要性である。知識や知見は、自他との間柄の場から「体得され体現されるべきもの」となる。この点で活発な論究が展開し、「敢えて自己が自我的フレームワー

地球システム倫理学会  
シンポジウム報告 ”Philosophy of Nature”  
ウィーン大学、2016-5-19 -5.21

クから脱却して、他者の磁場と他者の思考法に身を置くこと” “strangification” の重要性が話題の中心となった。Strangification（旧来の因習を脱却し新たな認識への一步を促す「疎外的体験」）は現代ウィーンの認知科学と認識論のエキスパート、フリードリヒ・ヴァルナーの造語で、元々はドイツ語の *Verfremdung*（疎外すること。疎外されること）である。当夜はヴァルナーも聴衆として参会しており、活発な論議が展開した。

「ウィーン比較思想・学際研究協会」を代表しての橋の基調講話は、「<間>の場・相互干渉の場」(The Field of Between) で、ピッチュマン(「自然科学の限界、哲学と自然科学のディアログの必要性」)とシェン(「現代に新生する東洋思想。西洋と東洋の対話の不可欠性」)の各講話内容との関連性をおのずと示すものである。<間の場>とは、橋の論理では「既存の自己がかかえる知見と他者の知見の間」に介在する「未知のもの、既存の伝統の枠にはまりきらぬ何らか」である。未知のものの価値判断をするにあたって、人間は往々、無意識的にも「既存の尺度とそれによりかかる自我の立場の正当性」に傾きやすく、<間の場>に一步を踏み出すことが難しい。が、そこから生ずるのは自らも知らぬ間に形成されるドグマであったり謬見であったりで、そこからは自他間の「乖離の場」(Field of Isolation) が生じ、非建設的な相互間の「自己疎外」が進むばかりである。真に建設的な<間の場>とは、自他が双方から他者の場へ向かって一步を進め、相互干渉 (Inter-Action) から相互浸透 (Intra-Relation) へと進展することである。当シンポジウムはロシアの BCA 国際生命科学協会との提携でスタートした経緯があるが、BCA 創設世代の志はまさに「異分野間の人材交流とその思索を通しての相互干渉」にあった。現代のデジタルネットワークでは、特定のキャッチフレーズを掲げてのスローガンづくりはたやすく、それを全世界へ発信することだけは容易である。他方、そこでは省察の不足からドグマ化され、一気呵成のイデオロギーを形成する例も稀ではない。それらは「我見に基づく短絡的な自己評価や他者批判」に他ならないのだが、「比較と言う思考法によって自他を客観的に省みることで、これらは自主的に是正される」と橋は論述する。

二日目の会場はウィーン大学哲学科。哲学・認識論・認知科学・情報学・教育学から精鋭が結集し、本会の精華ともいえる最新の研究成果を「認知科学と哲学のボーダー領域」で競い合った。その筆頭はフリードリヒ・ヴァルナー (Friedrich WALLNER, ウィーン大学、ウィーン フロイト大学) の独自の理論「構築的リアリズム」(Constructive Realism)である。そのメトードは前述した strangification（自己疎外からの脱却）であるが、特に現代の多国籍・多言語・多文化次元においては、既存の学際交流に加え、異文化間の相互理解・文化間の思考法の相違。これらの問題群が加わることになり、おのずと多様体としての真理の包括性が要求されるようになる。伝統の欧州哲学では顕著であった「一つの真理の絶対普遍性」をヴァルナーは明快に批判し、「多様な真理とその表

地球システム倫理学会  
シンポジウム報告 ”Philosophy of Nature”  
ウィーン大学、2016-5-19 -5.21

現法」を共通テーマに多国籍・異分野の研究者らが連携し、有形無形のフォーラムを形成することの肝要さを呼びかける。

続くハラルド・ヴァラッハ (Harald WALACH) はベルリン近郊の欧州大学の認知科学のエキスパート。量子力学の非局所相関現象 (teleportation) を、ライプニッツのモナド論における個物と全体の「普遍的調和の理論」で読み解き、認識論的場の統一論を志向するという独自の立場であるが、問題も少なくはない。モナドは存在論次元での単子で、単なる物質に還元され得ない一個の個体であり、そのものの「いのち」である。永遠の個体とその実体、いのちを示すモナド次元と、肉眼ではかりきれぬ一瞬に生滅する素粒子の次元は一息に統合するものかどうか。学位は認識論で、ハビリタツィオン（学位を前提とする大陸欧州の大学教授資格）は臨床心理学で取得しているヴァラッハだが、純粋物理学を規定とする物質的「相互干渉の場」、心理学をベースとする「心理的現象の場」、根本的に異分野たる両者の相互干渉は、とかくテーマ内容の乖離を伴いやすい。ライプニッツ的モナド調和の理論を鍵としつつ両者の統合を志向するわけだが、そこではさらなる哲学分野の存在論、物理学と心理学各分野における「存在」概念の根本的な相違についての比較論考も欠かせない。今後も論議を呼ぶ説であろう。

橋の **The Field of Between** は二つの側面をもつ。一つはミクロ、メゾ、マクロ物理学世界における自然哲学的〈間の場〉の理論。さらなる一つは、認識論としての〈間の場〉、さらには応用編として人間と人間の多様な出会いが因果関係を築く〈間の場〉である。物理学を起点とする自然哲学での **Between** とは何であろうか。まずは量子力学、ミクロの世界の実験を注目しよう。光子を一定の地点から観測機財に向けて発射する。その際粒子としての光子が発見されるのか。光の波動という現象が観測されるかは、現代の実験物理学でも結果が観測されるまで確定はできない。よく知られた量子力学パラドックスだが、光子が観測されるか波動と出るかを、橋は「入射する光子と探知機を構成する物質の〈間〉の場 **Between**、物質同士の〈相互干渉の場〉から生ずるものである」と考察する。〈間〉の場・**Between** の論理は、地球上とその近傍、つまり古典物理学の領域でも示される。即ち、光が発進する経路にプリズムを置くと、光は屈折し、七つの異なる波長によって七色の色彩がプリズムから観測される。これを西田幾多郎は「七つの色は元々自然界にあったのか、それとも実験と観測によって生じたのか」という問いを提出し、それには自ら「双方とも正解」、つまり「自然界に元々存在していた真理が、プリズムという媒体により顕現したのである」と考える（「物理の世界」、旧全集第 11 巻）。この事象も、橋によれば「入射する光と、媒体としてのプリズムの〈間〉 **Between** の場から生じた」ことになる。さて、マクロ次元での **Field of Between** は、「地球と月、それぞれの引力の相互干渉による海水の干潮と満潮の現象」に読み解くことができる。月と地球の両者は引力を媒体として向き合い、月の引力によってひき寄せられる海面では地球の遠心力の相互作用で満潮がひきおこされ、それ以外の海面は

地球システム倫理学会  
シンポジウム報告 ”Philosophy of Nature”  
ウィーン大学、2016-5-19 -5.21

干潮になる。これも地球と月の相互媒介の場、〈間〉の場である。〈間〉の場 The Field of Between は 橋のオリジナル理論だが、月と地球の相互干渉・マクロの Between に関しては、ウィーンを代表する現代哲学者、ハンス・ディーター・クラインの「システム理論とモノドロギー」(Hans-Dieter KLEIN, *System der Philosophie*, Bd. 4, Frankfurt a.M. 2003 に所収) の示唆を受けている。クラインの理論では、月のモノドと地球のモノドが出会い、月は地球に、地球は月にそれぞれの引力によって変化を与える、という主旨。クラインは欧州の純哲学の人材ながら、一種仏教的縁起(因縁生起)の理法にも似た関連性と調和の理論を呈している。

ここまでは自然科学(物理学)をベースにする自然哲学だが、この「Between 〈間の場〉」を人間学的な認識論でしぼりこむとどうであろうか。橋によると Between は、「既存の知識 A と未知の知見 non-A」両者間の相互干渉から発展し蘇生する無窮の知識」である。思考する自己自身の内部における A と non-A の比較を通しての知識の深まりでもよいし、あるいは自己と他者が相互干渉(inter-action)を展開しての新たな知見への到達でもよい。いずれの場合も、人間の人間たる本領発揮の場といえよう。さらなる応用編としての「人と人の出会いの場における Between」は、現今のデジタル情報ネットワーク時代における複雑系ともいべき人間関係の修羅場―。善と悪、双極性双方向への激変とダイナミズムを秘めた「危険性と創造性が隣りあわせるきわどい相互干渉の場」でもあることを橋は提起し、注意を喚起する。学位とハビリタツィオン双方とも哲学全域という思考の磁場を生かした自然哲学であり、自然科学と哲学の学際成果であろう。

スプリドン・コトルーフニス(Spydon KOUTROUFINIS) はギリシア出身、ベルリン工科大学で認識論でのハビリタツィオン(教授資格)を取得した人材。「ホワイトヘッドのプロセス理論と経験における〈喜び〉の関連性」につき、面白い論を打ち出した。氏によれば、喜び(desire) は人間はもとより、他の動物の行動においても生命の持続において欠かせない原動力をもつ、言ってみれば「いのちの源泉」である。とりわけ人間は自己意識をもち省察の能力を有するだけに、新たな知識を得たり、既存の知識にはなかった新たな認識に達することは「向上」の喜びをもたらすのみならず、既存の知識をも新規に獲得した知識との相互干渉で活性化させる。「喜び」あつてこそ、人間は困難な状況から逃避することなく問題に取り組み、解決を見出すことに意義を認めるのである。「喜び」を実感してさらなる知識に一步を踏み出し自らの人生を、周辺の人々を豊かにするのもプロセス存在論での一過程である。「喜び」を喪失し、敗北感や劣等感でおちこみながらもなお、希望の原点を求めてやまないのは人間のいのちの本性であり、「〈喜び〉へのプロセス理論」が打ち立てられることの必要性を述べる。従来「喜び」や「痛み」「苦悩」は分析哲学系、認知科学系の学究者からは「主観性の典型というべきカテゴリーで、純粹客観的な記述はまず不可能」とされてきた。(Wittgestein, *Philosophische Forschung*, 257-258, 283-284, 289-291;

地球システム倫理学会  
シンポジウム報告 ”Philosophy of Nature”  
ウィーン大学、2016-5-19 -5.21

Putnam, „Die Natur mentaler Zustände“, in: P. Bieri, *Analytische Philosophie des Geistes*) 客観的記述を「不可能」と決定づけてきたことで、分析系哲学は「喜び」・「痛み」・「苦しみ」といった人間存在の全体性を網羅するカテゴリーを自ら対象外に退け、また自らも「普遍的真理の<学>としての哲学本来の原点から離脱していったという現実がある。そうした中で、ホワイトヘッドのプロセス理論は、新たな事実を新たな知識を経験することによってそのつど変容しゆく人間の思考の本体を探ろうとするユニークな立場である。このほどのコトローフィニス氏の研究では、このプロセス論にさらなる「喜びの原理」を打ち立て、新たな認識論を打ち出そうとするものである。認識論というフレームから一步を踏み出す「新たな人間学」というべきであろうか。

その他、二日目ではヴァルター・カルバン(Walter KARBAN, ウィーン) が「複雑系システム理論における nothingness (無) の重要性」を打ち出した。従来の西洋哲学と認識論では「真空的虚無」として顧みられなかった nothingness だが、カルバンによると「既存の知識を絶対否定に追い込む no-thingness。それは、<虚無・皆無>の次元を上回る『無窮の思索への媒体』であり、創造的なる無である」。一種、久松真一の「能動的無」や田辺 元の「媒介的無による弁証法」を思い起こさせる立場だが、理論の本体はあくまで「認識論的<無>の意義」である。エーリヒ・ハンベルガー (Erich HAMBERGER, ザルツブルク大学) は「コミュニケーション理論における<間柄>の場」に注目し、固定的自我が他者との相互干渉によって打破されるプロセス並びに、創造的人間関係を築くにあたっての原理を詳述した。先ごろ達成した彼のハビリタツィオン(教授資格)論文の中核である。

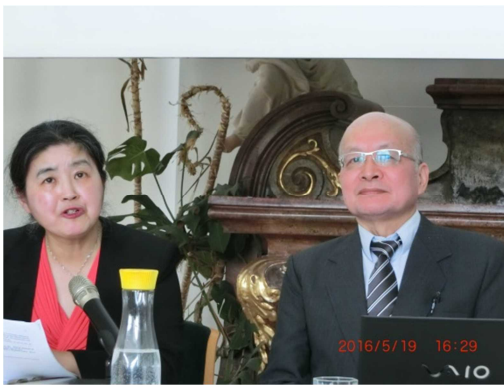
三日目は三つのセッションに分かれての発表と論究。フェリックス・バーデルト (Felix BADELDT, ウィーン、内科医) の「中国医学(TCM)理論の内科と心理療法への応用」、マリアンネ・ベネタトウ(Marianne BENETATOU, ギリシア哲学会) の「陰陽五行論における最終目的論の実践とアリストテレスのエンテレケイア理論の比較」、ヴェルナー・ガブリエル(Werner GABRIEL, ウィーン大学、哲学) の「中国哲学における自然観」、カール・クラトキー (ウィーン大学、物理学) の「現代物理学の立場から読み解くチベット医学の心身観」、ゲルハルト・クリュンガー (Gerhard KLÜNGER, ウィーン) の「ゲーテの自然哲学と近世自然科学の比較」、ゲルハルト・クロムバッハ (Gerhard CROMBACH, ウィーン、心療内科医) の「『経験すること』の意義—東洋と西洋の文化論的比較」、ゲラルド・ヴィルトバウアー (ウィーン フロイト大学) の「初期仏教思想における<一切皆苦>の超克—心理学と心理療法への応用」、中戸川孝治 (Koji NAKATOGAWA 北海道大学) の「『多様体の哲学』として再構成される田辺哲学」、高橋 隆雄 (Takao TAKAHASHI 熊本大学) 「古代日本の神話におけるアニミズム」のほか、アメリカの禅僧ウィリアム・希玄・エケソン(William Kigen EKESON) の「禅仏教における主観と客観の関連性と統合」、またオーストラリアのメルボ

地球システム倫理学会  
シンポジウム報告 ”Philosophy of Nature”  
ウィーン大学、2016-5-19 -5.21

ルンから来欧したセラピスト、ジョン・メルサー(John MERCER)の「森田式心身医療法における禅仏教の影響」などが注目された。

三日間のシンポジウム全体を振り返ると、人文系と自然科学系がそれぞれの境界線で出会い、他分野への敬意と異分野からの関心を媒介として活発な相互干渉を達成、一種の〈間の間・相互干渉の間〉を成したというべきか。単なる形式的和合主義を越えての「異分野間の真の『相互理解と相互浸透』」には長い道のりが必要だが、その達成に向けてそれぞれの参加者がそれぞれの道を踏み出した一ともいうべき充実した成果が見られたことは特記するに値しよう。本会の成果からはまずは電子書籍での論集、間において書籍版の論集刊行が企画されている。

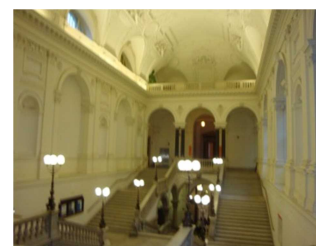
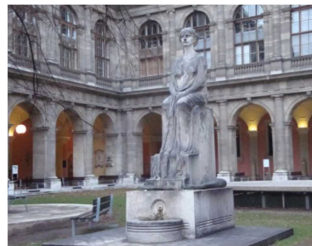
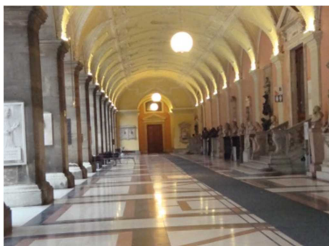
2016.8.15. ウィーン比較思想・学際研究協会 *KoPhil*



H. Hashi, V. Shen (2016-5-19)



講話者 (2016-5-21)



ウィーン大学本校舎から 回廊、中庭、本校舎内部

<http://kophil-interdis.at/wb/pages/symposien.php>